韓国の国士、朴正熙の遺言　前編

今の韓国の近代化の礎である「漢江の奇跡」を成し遂げた元韓国大統領、朴正熙（パク・チョンヒ）の言葉の一部を紹介する。彼は、それ迄の朝鮮であれば、決して受けられなかったであろう教育を受ける幸運に恵まれた。貧農出身ながら努力家の彼は、日韓合併時代に高等教育を与えられ、満州国軍官学校、日本の陸軍士官学校で学び、日本の歴史を知り、正しい歴史観を持ち、それ故、反対を押し切り１９６５年に日韓条約を締結、日本から莫大な経済援助を引き出し、極貧の韓国を救ったのである。

日本軍将校時代の朴正熙。日本名　高木　正雄。

しかし、１９７９年大統領だった朴正熙は側近に裏切られ、射殺され、彼等の**ご都合主義の歪められた歴史をいかようにも創作して行くことになる**。では彼は何を考えていたのか？それが「朴正熙選集」の第二巻に記されている。

この本の見開きには「この書を、わが愛する祖国と国民に捧ぐ」とある如く、彼は真の愛国者であった。その本の中の「五千年の歴史は改新されねばならない」という章に、書かれた彼の愛国とは、如何なるものなのか確認したい。

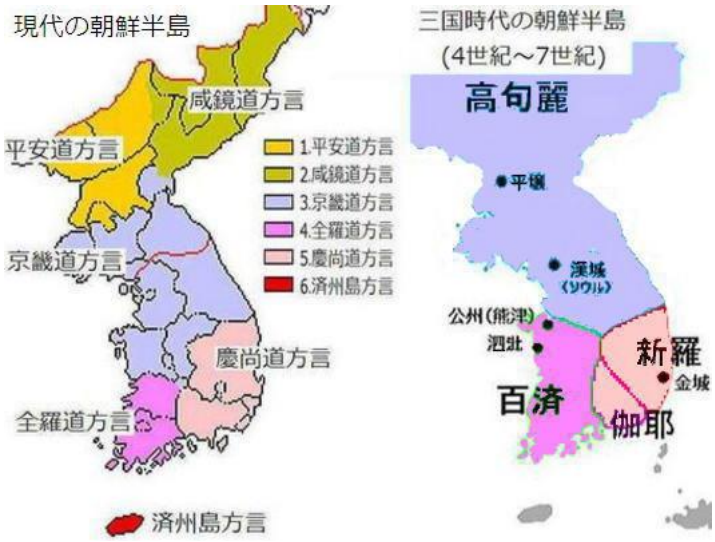
朴正熙選集　1962 年に出版された。

＜国史大観＞の序に次の文がある。

「人が高貴な点は文化の創造と進歩にある。文化の創造と進歩は、自己の過去を回顧し、反省し、批判しようとするところから生まれるものである。人間の生活には元来、過ちと欠点が多い。しかし過ちを過ちとして、欠点を欠点と知って、二度とそれを繰り返すことなく自己の現実を、より良い状態に改善、向上しようとするところから進歩や発達が生まれる。そこから偉大な文化が発生するのである。即ち人類は、歴史を有し、歴史を土台にして自己保全、自己発展、自己完成の道に邁進するのである。では我々は、我々の歴史を回顧、反省、批判する時、何を感じることになるだろうか？　歴史を整頓し、偉大な新しい歴史を創造する為の精神的な新しい土台を作らねばならないであろう」＝（P. ２３８）. . . と。

彼が韓国人に捧げた言葉は、韓国の歴史を褒め称えるのでなく。歴史を回顧し、反省と自己批判を促す内容となっていたのである。彼は「韓国人は先ず自らの歴史を直視しなければならない」。即ち、本当の歴史を知り、反省し、自己批判をする、それが「偉大な新しい歴史を創造する精神的な新しい土台となる」と言っていたのである。それは当然であり、現状から飛躍しようとしたら、真実を知らなければ真の改革改善は不可能であり、国民は賢くはならず、永遠に愚かな民のままであろう。日本も他山の石とすべきである。韓国民が本当の歴史を知ることは韓国人のみならず世界の人々にとっても福音となろう。

では彼は韓国の歴史をどう見ていたのか？　朴正熙は「五千年の輝ける歴史と文化」（金両基氏の韓国の歴史）などという「子供だましの甘やかし歴史観」に決然と拒絶をしていた。彼は「漢の武帝東方侵略の古朝鮮時代から、高句麗・新羅・百済の三国時代、そして新羅の統一時代を経て、後百済・後高句麗・新羅の後の三国時代、さらに高麗時代から李朝五百年に至る、わが五千年の歴史は、一言でいって退嬰と粗雑の歴史であったといえる。(P. 234) . . . . と。その理由を次のように語っている。



「いつの時代に辺境を越え、他を支配したことがあり、どこに海外の文物を広く求めて民族社会の改革を試みたことがあり、統一天下の威勢を外に誇示したことがあり、特有の産業と文化で独自の自主性を発揚したことがあっただろうか？　いつも強大国に押され、盲目的に外来文化に同化し、原始的な産業の枠からただの一寸も出られなかったし、せいぜい同胞相争う為、安らかな日がなかっただけで、「姑息」「怠惰」「陰逸」「日和見主義」に示される「小児病的」な封建社会の縮図にすぎなかった。いまここで、その際立った我々の歴史を落ち着いて解剖してみることにしよう（P. 234）. . . . 。

小児病的、即ち韓国人は、言動が幼くて感情に流され、極端に走り易い傾向があるとし、次回の歴史観を披歴する。

平成２９年５月２３日

志雲会塾長　有　馬　正　能